

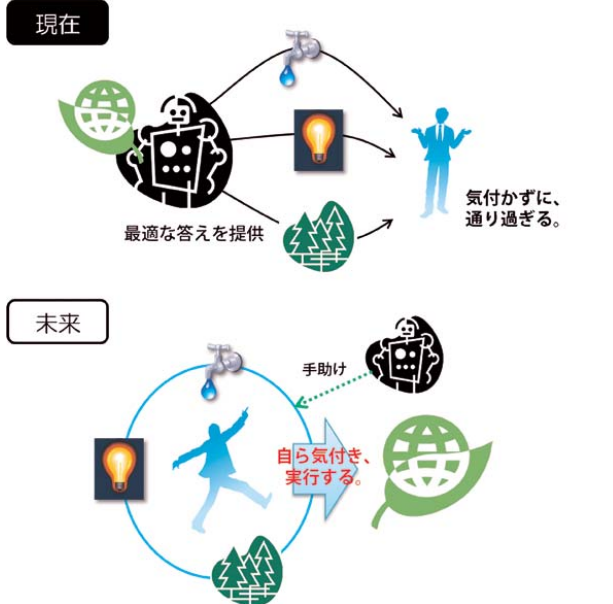
コンテスト入賞作品

ネイチャー・テクノロジー研究会

宗官 祥史さん (東京都北区、28歳)

人間の存在を感じて自動で点灯・消灯する電灯や自動で省電力温度を設定してくれるエアコンなど、環境に優しい情報技術が発展してきています。しかし、これらの技術は資源の無駄遣いを減少しますが、電気をつけたら消す、水を流したら止めるといった本来人間が行うべき行動も減少させてゆくおそれがあります。

2030年、情報技術は私達にとって単に環境を守ってくれるものではなく、環境問題と向かい合う私達に最も良い状態を教えるようになるでしょう。電気がつけばなしなら、自動で消灯するのはなく「消し忘れていまずよ」と気付かせて、自ら消灯するようになります。また、毎日割り箸を使わなくなることで「木々が 本切られずに助かった」と自分の行動が地球にとって優しい振る舞いであることを教えてくれます。便利な技術が何もかもしてくれるのでなく、人間が自分たちでできることを情報技術から学習し、実践していくようになっていきます。

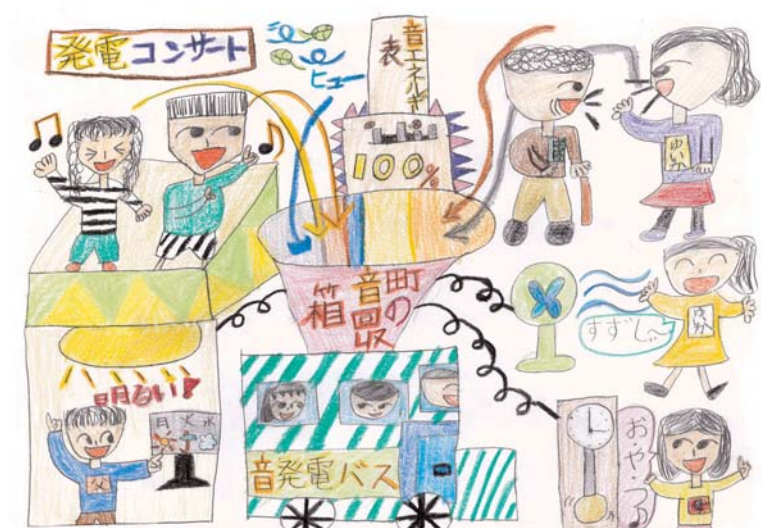


【審査委員長賞】

環境問題を解決してくれる便利な技術から、一緒に環境問題に取り組んでくれる技術へ、主体性の変遷

森 結加さん (愛知県春日井市、11歳)

私は、「音のしん動で発電」というテーマを作り、この絵を書きました。音のしん動は、音の音量で決まるので、小さい音でも発電できます。例えば、風の音。台風ではなくて普通にふいているちょっとした風でも発電できます。また、ごはんを食べる音、本をめくる音でもできるため、ごはんを食べる事や本を読む事を忘れることなく、楽しみとしてできると思っています。



【優秀賞】音の振動で心豊かに

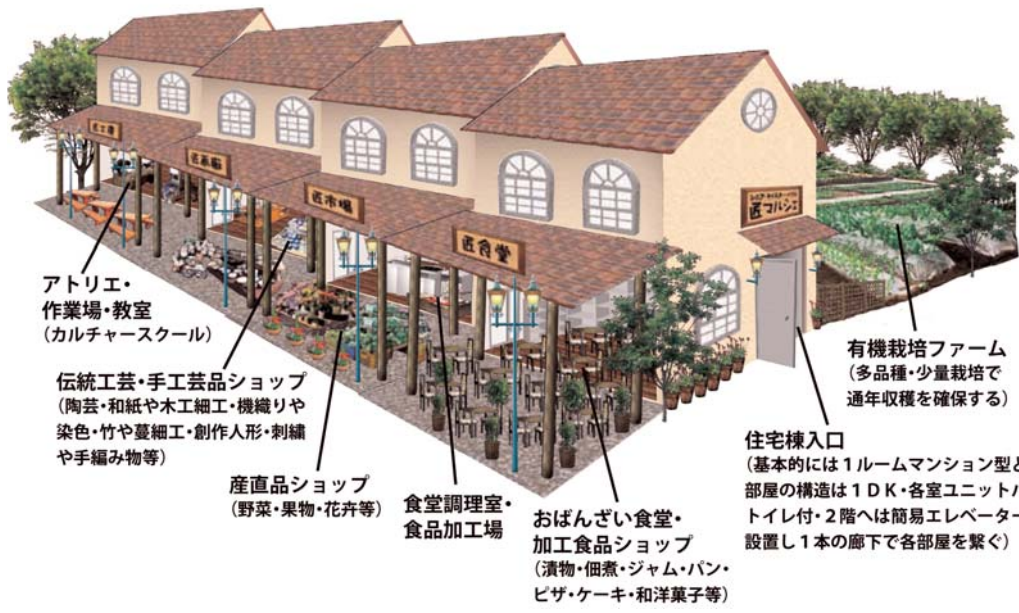
中尾 和正さん (東京都北区、63歳)

2030年、少子高齢化社会が頂点に達し、老人福祉施設と労働力が大量不足の時代に突入。貧富二極化が進み、厚生年金が出ない個人事業主や職人達の高齢化が問題に。保証人がいない高齢者は賃貸住宅に住めず、労働力不足なのに働かなくても仕事がない老人が激増。この問題解決策として21世紀型コミュニティ住宅を提案する。職人や農家の知識と経験を活かした「マイスター・ハウス」である。まず、一芸に秀でた老人マイスター

達にコミュニティ住宅をシェアしてもらう、次に技の継承者(若中年)の入居で脇を固める。絵手紙の先生、陶芸・木工・染色職人、裁縫編物のプロ、花や野菜・果物づくりの経験者、佃煮やジャム等食品加工の経験者、パンやケーキ職人、調理師達がノウハウを競うコミュニティ・ハウスとする。引退後の個人技を集結復活させる。働き甲斐こそ生き甲斐。住宅部に隣接しアトリエ作業場、農園、直売ショップ兼おばんざい食堂を設置する。

シニア・マイスター・ハウス「匠マルシェ」

高度な技術・技能を持つ「匠」達が、高齢化の中で職場を失って来ている。使用人であった職人や個人事業主の大半は、国民年金である。一芸に秀でたシニア達が一緒に暮らしながら、それぞれの匠技でビジネス活動ができる店舗や作業場、農園を併せ持った集合住宅を開発する。高齢化で休耕畑となった農地を特区認可の中で店舗兼住宅として廉価に活用。



【大賞】シニア・マイスター・ハウス「匠マルシェ」

「余白率」という指標の導入

内山 明さん (札幌市北区、23歳)

現在日本の社会は高速化と複雑化が進行し情報が氾濫している。一方、日本の伝統文化は間(ま)と余白に豊かな意味を見いだす文化であった。そこであらゆる物体と状態への新しい評価指標である「余白率」を提案したい。

導入例を2点挙げてみよう。

ある企業では従業員の事故が相次ぎ、職場の「余白率」を計算したところ、21%であった。そこで3時のティータイム休憩を導入したところ、「余白率」が37%へ上昇したと同時に、事故が減少した。

都市Aは人口と建築物の密度が高く、都市の「余白率」が16%である。都市Aに住むBさんは気分転換のため旅行に行くことを考え、山間部に位置し「余白率」が86%の観光地Cを旅行先を選んだ。

これまで漠然と「窮屈だ」「ゆとりがある」などと感じていた物事が「余白率」という指標で定量化される。「余白率」を意図的に増減させることで心身ともに健康的な生活が可能になる。

余白率の導入

余白率とは？

任意の測定対象の余白率 = (測定対象の余白率 / 構成要素の最大許容量) × 100

測定対象の例

構成要素の例

2030年までに開発された新たな観測手段を用いて、測定対象の構成要素の構成要素を同時に導入し、余白率を算出

例：職場環境を測定する場合、休憩時間、人口密度、騒音、においなどの複数のデータから総合的に余白率を算出

衣・食・住のあたりまえ ~16歳の娘と暮らす未来~

柏木 貴行さん (東京都葛飾区、30歳)

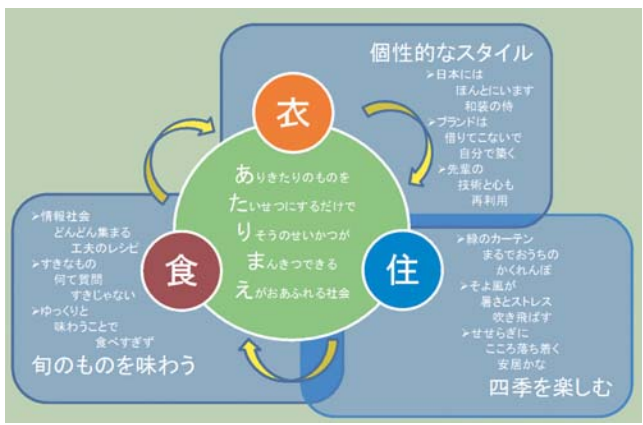
2030年、つい先日生まれたと思っていた娘も16歳になった。この16年、日本は成長一辺倒の考えを改め、「あたりまえのことが幸せ」をスローガンに社会を変えてきた。

「衣」のあたりまえはそれぞれが個性を持つこと。学校には年配者が集い、若者に裁縫の技術を教え込む。既製品の画一的な服装にあふれていた街には和洋新旧の良いところを併せ持つ個性的で機能的な服装が増えた。

「食」のあたりまえはいつも旬のものを食べる。食べたいものを食べたい時に食べる社会から旬の食材を工夫のレシピでゆっくり楽しむ社会に。最近は好き嫌いという言葉は耳にしくなくなった。

「住」のあたりまえは四季を楽しむこと。緑のカーテンが全世帯に普及、暗渠化されていた川も元の姿を取り戻した。風が通り抜ける街づくりも進み、夏に冷房を使うことは無くなった。昔は窓を閉め切って冷房をきかせたなんて娘は想像ができないという。

間もなく生まれる娘とそんな未来で暮らしたい。



人力(ひと)エネルギー！ 活かす、生み出す、活気めぐる町

川手 真理子さん・野乃さん (京都市左京区、36歳・9歳)

2030年、水力、風力、太陽光エネルギーに加えて、「人力(ひと)エネルギー」が普及しています。町では人力車をよくみかけるようになりました。長距離の移動には、みんな電車をつかいます。人力発電車両では、自転車型発電機にまたがり30分汗を流した若者が「人力っぶ」をもらい旅をつづけています。下車した町の公園では、献血車の横に「人力エネルギー」蓄電池が

rがまわっています。ランニングマシン型の発電機で子づれのママや休けいの中のサラリーマンが健康づくりをしながらエネルギーをつくっています。満タンになった蓄電池は地域の学校へ。学校の電気はこのエネルギーでまかなわれています。学校の子も大切な「人力エネルギー」を生み出しています。今日は学校のとなりの「先輩のいえ」で暮らすお年寄りのもとを訪ね、笑顔エネルギーをお届け。元気いっぱいあいつは心を満タンにします。一緒にお散歩をしてよもぎをつみ、おだんごの作り方を教わりました。お年寄りの知恵は「人力エネルギー」の中でも暮らしを豊かにするものとして大切にされているのです。



発電献電ボランティア(健康器具を使った発電巡回車をつくり、発電された電気を社会福祉施設等に献電する)

大野 博文さん(東京都あきる野市、68歳) / 土屋 めぐみさん(神奈川県大和市、33歳)

献血車ならぬ献発電車を造り、発電機能を持ったルームランナー、自転車、体操器具などの機器を載せ、献血車のように人が集まるところを巡回し、ルームランナーや自転車などに乗ってもらい発電する。その電気を養護施設や老人ホームなどの社会福祉施設に無償で提供する。体育館等の設置型健康器具も同様に献電可能機器を設置し、養護や老人ホームなどの施設に無償で提供できるようにする。

献電が事故や病気の治療などの事後に用いられるのに対して、献電は献電者本人の健康増進に加え社会貢献を図ることができ、シームレスなボランティア

活動が老若男女にかかわらずできる。廃エネルギーだった人力エネルギーを発電に利用することにより、社会的コストを引き下げ、健康増進、CO2削減に寄与する。



自然やいきものといっしょにくらす街

老川 緑さん (千葉県松戸市、14歳)

みどりの植物が家の壁を覆っています。特に屋上では、水田でお米を作っています。壁の植物では、トマトやフルーツがとれて、屋上の水田では、どじょうなどもいます。自分で食べるものが、すぐ近くとれます。水田の小生物、カエルやアメンボ、木にはセミの声があり、街中に、日本の田園の夏がやってきます。夕方には、日暮が鳴いて、それを聞いて子どもは家に帰ります。田んぼが屋根にあるので、照らされても涼しいです。暑い日は川で遊びます。家の横にはベットの家もあって、犬も快適に暮らせます。

虹のできる家

宮地 有沙さん (東京都杉並区、12歳)

私の考える2030年にあるべき、心豊かなライフスタイルは、結婚して産んだ子供と未来の子供達がよい環境で生活を送ってほしいので環境をより良くする生活をしたいと思い考えた生活です。

私の中ではガソリンで走る車がすごく環境に悪いと思うけど、車は日本でも世界でも大勢の人が使用しているので、自動車の使用をやめることは無理だと思ふから、電気自動車などの使用を大勢の人にしてもらいたいです。でも、もし大勢の人が電気自動車を使用したら今度は電気が必要になるので、自宅でソーラーパネルと水車で発電をし、その分の電気で充電して走る、という生活を送れば電気が足りる

と思います。水車のしぶきで、夏の朝には虹がかかって、きれいです。水しぶきで温度が下がって気持ちよく起きられるから毎日が楽しくなります。水車の池ではつりもできるし、その水で畑に野菜がつかれます。電気代やお金もかからなくなるから景気もよくなるし楽しいと思う生活を世界中の人達にしてほしいと思いました。

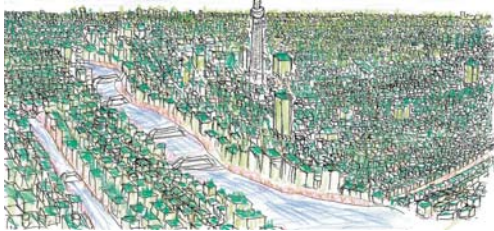


光と風と水と緑と暮らす 街づくり

吉田 一富さん (岐阜県安八町、46歳)

都市部の建物の壁面には必ず植物を植え街ごと緑化を施す。地表面には見た目も感触も土の路地材の歩道が設けられ歩道の側面には小川のような水路を通し常にせせらぎの音が聞こえてくる。水路の横にも草木、花が咲き都市にいながらにして自然に触れることができる。街中がまるで森の中にいるように木で覆われ夏の暑さを和らげる。風は枝を揺らしてざわざわと聞こえる葉がこする音も、小鳥のさえずりも人々を癒やす。上空から街を見ると一面に緑と空の青が映る太陽光パネルが見える。街の中には小型の風力発電、水路には小型の水力発電機が等間隔に置かれている。

街中で光、風、水といった自然エネルギーが有効に活用されている。森の中の都市でそれらの設備は決してじゃばらず、目立たず自然と調和したデザインとなっている。そこで暮らす人々は季節の恵やかなうつろいを感じながら心穏やかに暮らしている。



幸せな体験を分かちあう場 「Share time, Share smile」

板谷 友香里さん (東京都港区、30歳)

2030年は、血縁や地縁ではなく、ひとりひとりが幸せを分かちあひながら、困っているひとと、そうでない人も、家族のように居心地のよい社会になっている。

「今日は、どんな遊びをしようかな！」

学校が終わってから、学童のお迎えが来るのが待ち遠しい時間です。学校のクラスが世界の全てになりがちな小学生の子ども達にとって、シェアカフェで違う学校の仲間や色んな年齢の大人に会える事は世界が広がる瞬間です。夕方、お父さんが学童保育へ迎えに来ました。今日は、金曜の夜。「折角なので、ママも呼ぼうよ！」保育園に妹を迎えに行っていたお母さんも合流して、友達家族と一緒にシェアカフェでご飯を食べる事になりました。ご飯を食べっていると、新しく事業を起こしたいという起業家の人の発表が始まりました。「自分で会社を創る人もいるのか！」将来、会社に入ったり、野球の選手になるだけではなく、自分で会社を起す人がいる事に気づきました。



DNP 未来のワクワク賞

サンデン 未来の素敵な公共空間賞

大和リース エコログリーン賞